

大島貞夫先生の人と業績

井上孝代（明治学院大学名誉教授）

大島貞夫先生の訃報に接し、明治学院大学の大先輩として深く弔意を表します。奉職の時期が異なり、残念ながら大島先生と直接の交誼の機会を逸しましたが、その優れた業績には同じ専門領域の学徒としてかねがね敬意を抱いておりました。若輩の身で恐縮ながら、ここに『明治学院論叢 ISSN 0918-9866 第 628 号 大島貞夫教授退任記念論文集 (1999)』に基づき、大島先生の偉大な足跡をご紹介させていただくことを光栄に存じます。

大島先生は桜ヶ丘保養院（精神科）の心理技術員としてそのキャリアをスタートされました。心理検査等の業務以外にも、患者さんと、養豚、農作業等の作業療法などにも積極的に従事され、そこでテオドル・ニューカムの「役割理論」に出会い、入院、退院、社会復帰過程を役割喪失から役割回復までのステップとして観るというユニークな視点を示されました。

その後、母校の明治学院大学で精神衛生を教えることになりました。同時期に科研費助成を受け、「精神障害に対する認識および治療の態度に関する研究」を 5 大学、1 研究所、1 病院で行われました。その翌年には、「精神分裂病治療における家族に対する研究」というテーマで科研費助成を受け、家庭福祉研究所（若林龍夫所長）とともに「精神分裂病患者家族の医療に対する態度」を担当されました。

のちには統合失調症を主とした集団心理療法やグループアプローチを経験されました。「役割理論」では精神障害者の方には荷が重いのではないかと、むしろ「居場所」という言葉のほうが、「役割」に代る概念になるのではないかとこのコミュニティ心理学的な新しい知見を示されました。そして、自らも明治学院に「居場所」を見つけたという印象的なことばを残されています。同じ職場に居た者として何だか人間的な親しみを感じます。

大島先生のお仕事を端的に知るには退職 5 年前に諸論文をまとめられた『臨床社会心理学を目指しつつ』大空社 (1994) が最も適切であろうと思われます。この本の中では、その内容は精神障害者の作業療法、集団心理療法、薬物依存、職業とストレス、家庭内暴力など多岐にわたっています。また、海外精神保健の実状も、米国西海岸、カナダのバンクーバー、イタリアのトリエステ、ニューヨークのファウンテンハウスなど先駆的な場所を精力的に回られて、その紹介をラディカルに、時にユーモラスなタッチで文章にまとめておられます。

日本の社会福祉と精神障害者の援助のために戦後の歴史とともに歩まれ、常に時代に先駆けた視点から日本応用心理学会にも多大な貢献をいただいた大島先生のご冥福を心よりお祈りします。



大島貞夫先生

■略歴

- 1929 年 1 月 25 日 東京に生まれる
- 1948 年 4 月 慶応義塾大学文学部哲学科心理学専攻に入学（昭和 25 年 9 月同校を卒業）
- 1950 年 9 月 東京医事新誌局（医学雑誌社）に勤務
- 1955 年 4 月 社会福祉法人桜ヶ丘保養院心理技術員となる

- 1956 年 5 月 慶応義塾大学医学部神経科教室助手を兼任
1960 年 6 月 慶応義塾大学より医学博士を授与される
1962 年 4 月 明治学院大学文学部助教授となる
1969 年 4 月 明治学院大学社会学部（創設）教授となる（臨床心理学担当）
1999 年 3 月 明治学院大学を退職

■日本応用心理学会での活動

- 1979 年 5 月 日本応用心理学会監事（昭和 58 年 3 月まで）
1983 年 4 月 日本応用心理学会運営委員（1986 年 11 月まで）
1986 年 12 月 日本応用心理学会常任運営委員（1988 年 11 月まで）
1988 年 12 月 日本応用心理学会運営委員
1990 年 10 月 日本応用心理学会常任運営委員

■所属学会

日本心理学会，日本応用心理学会，日本心理臨床心理学会（平成元年 3 月臨床心理士 No1291）

■主要編著書

- 1969 年 『精神衛生』（近藤章久他と共著） 建帛社
1982 年 『異常心理』（秋山誠一郎他と共著） 有斐閣
1994 年 『臨床社会心理学を目指しつつ』（単著） 大空社
1996 年 『新版心理臨床入門』（共著） 新曜社
1997 年 『チルドレン ワールド』（共著） 一芸社

■主要論文

- 1986 年 『集団精神療法の実際とその問題点』（単著） 慶応義塾大学学生相談室紀要，16.
1991 年 『精神障害者に対するコミュニティケア』（単著） 明治学院論叢，476.
1992 年 『「治す」とは何か？—トリエステの精神医療を観て考えたこと—』（単著） 明治学院大学学生相談室研究紀要，3.
1995 年 『学生相談が始まる迄』（単著） 明治学院大学学生相談室研究紀要，6.